ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第74号 2021年2月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 教育研究の普遍性・自律性と、大学のコミュニティと、外部資金をめぐって	加藤善子	2
逸話と世評で綴る女子教育史（74）成女学校→成女高等女学校	神辺 靖光	10
東京帝国大学学友会緑会の活動模様 ―『緑会雑誌』創刊号（1928年3月）から ―	谷本 宗生	14
学校資料の教材化を模索して⑱ ―「学校内に博物館を作ろう！」を事例に―	八田 友和	17
明治後期に興った女子の専門学校（29）帰国後の津田梅子	長本 裕子	21
カレッジノベルの研究への道（20）：久米正雄「受験生の手記」（11）	吉野 剛弘	25
戦後生徒会活動成立史の研究 ⑮ ―『新制中学教育ノート 第3集』にみる生徒会論（2）―	猪股 大輝	28
木下広次をめぐる史料（9） ― 曽根松太郎『当世人物評』にみる木下広次 ―	冨岡 勝	33
体験的文献紹介(22)―中等教育史を日本私学研究所の紀要・調査資料に書きはじめる ―	神辺 靖光	37
刊行要項（2015年6月15日現在）		41
短評・文献紹介		42
会員消息		43

コラム

教育研究の普遍性・自律性と、大学のコミュニティと、外部資金をめぐって

加藤善子
（信州大学）

大学の果たす役割の中心は教育と研究だが、そのどちらにおいても、掲げられるべき理念は「普遍性（universality）」と「自律性（autonomy）であった。大学は、不特定多数の人間にあまねく開かれていなければならないし、大学が作り出す知識は、普遍的な真理でなければならない。また、大学や大学人は、特定のミッションに偏ることなく、自律的な意思決定を尊重してきた。一方、市場で評価を受けるということは、誰がそれを求めているのか、そしてそれに対してどのぐらいの値段がつくのかを考えることに他ならない。伝統的な大学における教育と研究は、普遍性と自律性の原則から、この市場メカニズムの参入をずっと拒否してきた[1]。―上山隆大『アカデミック・キャピタリズムを超えて』

学問を普遍的に役立てる：二つのアプローチ

かつては、大学は基礎科学に、産業界は応用科学にそれぞれ責任を持っていると考えられ、その境界線は明確であり、二つの世界は整然とわかれていた。そこには「公共的な知のモデル」が存在しており、公共的な知の体制の諸価値―出版の重要性や、それに伴う情報の自由な流通の価値が大切にされる。新自由主義が政府を動かし、大学は知識を資本化するように求められ、それを教員に求めるようになった。そこでは、大学内部は市場原理に組み込まれる。大学執行部は、教員の開発した技術に投資し、多様化する知的財産を保護するために訴訟を行うベンチャー投資家となる[2]。

この二つの原理にはそれぞれの理屈がある。前者の立場は、本来は

公共的な目的に供される科学知識が、市場の力の前で私的利益に供されてはならないという立場で、営為的行為を退け、市場の乱用から守ることが学問の普遍的な利用を実現するという立場である。ここには、プロフェッショナリズムによる公共的な倫理観が存在し、科学者によって作られた知識はすべての研究者にアクセス可能なものでなければならないという規範が共有されている[3]。しかし一方で、公共的であるはずのその知識やサービスはその職業団体が独占しており、限定的であるにせよやはり市場で交換されていることに違いはない。後者の立場は、たとえば大学で研究され開発された技術を特許化することは私的な利益を求めてではなく、むしろ特許を取得することによって社会に普及することを願う、というものがある。民間にこれらの技術や知識が移転され、誰もがアクセスできる商品・サービス開発に繋げることで、普遍的な公共の利益に供するという考え方である[4]。

どちらの理屈を選ぶにせよ、間違いなく言えることは、①成果を役立てるまでの研究活動には資金が必要であり、その資金は誰かが供出してきたということ、そして、基礎研究全般や人文社会系の一部においては特に、②成果がいつどのように役立つのかがさっぱりわからない、ということである。古代から権力者がパトロンとなって学者を集め、思想や信教の自由を時には認め時には制限をして自らの用に立てようとしてきた。学者は時の権力者を通じて自分たちの研究成果を世に出そうとし、影響力を高めようとしてきた。その延長上で、近代以降は国家がパトロンとなり、現代はそこに企業が加わる。アメリカにおいて、キャンパスの一角を企業が占めるリサーチパークの成功が今の産学連携の方向性を決定づけたという。ただし、「どの時代においてもアメリカの科学者は、理想としての科学研究を遂行するために、常にどこにパトロネッジがあるのかを念頭に置き、パトロンとの緊張関係のなかで政治的駆け引きのゲームを繰り広げてきた」[5]のだ。

どちらの理屈も理解できるし、資金を用立ててもらっている以上その負託に応えることは当然である。申請書を書いては途切れなく資金を調達できる優秀な同僚もいて、研究者の自由度と自律性を増すとして外部資金獲得を歓迎する動きも間違いなくある。同時に、市場原理に乗りやすい分野とそうでない分野があることも確かである。何かにつけて「お金がない」ことが何かを「しない」ことの正当な理由として通るようになり、大学の中にいても市場原理が外から押し寄せてくるという現実が、研究者が自分の「市場価値」から距離を置き、「普遍的価値」に自らを置いて教育研究に従事することを不可能にしている。大学で職を得ている我々の日常に何が起こっているのかをすこし文字に起こしてみたいと思ったのは、この数年の何とも言えない市場化の圧力が、日常になりつつあるからである。同僚との関係や大学の存在意義のゆらぎや、研究者としての我々の、目指すべき価値や生きがいの喪失につながってはいないだろうか、という思いを抱くようになった。

市場原理の導入は大学と研究を守るか

ハーバード大学の元学長であるデレック・ボック『商業化する大学』（原題は“Universities in the Marcketplace”）を読むと、市場での競争に参入したが最後、そこは蟻地獄だということがわかる[6]。彼は学長就任のその日から、どのように資金を調達するかを寝ても覚めても考えていたという。優秀な研究者を大学に招聘するには、高い給料を払い、最先端の実験設備を整える必要があり、最新の機器は、常に買い替えなければならないのだと。その資金をどう調達するのか。大学のありとあらゆるスペースを広告用に切り売りするか？ お金を払ってくれる人に特別なプログラムを提供して高く売るのか？ 学生スポーツにより多くの金を投入するのか？

どれも結局は幻想なのだという。学生スポーツは、広告として使おう

とすると勝つチームをつくることが必要になる。すると高給で優秀なコーチや監督を雇うことになり、最新のトレーニング設備を整えることになり、学生選手は勉強よりも勝つことが大事になり、選手らの学ぶ権利を大学が奪うことになる。大企業の経営者向けの研修プログラムは、良い収入源にはなるが、金を払わない人を教育機会から締め出すことになる。

より深刻な問題は、特定の企業から資金提供を受ける場合の、研究データや内容の秘匿義務である。企業にとって都合の悪い研究成果を発表できないだけでなく、良心に基づいた成果発表（場合によっては告発）ができなくなるということである。日本でもその弊害は見られるようになってきており、裁判に発展する場合もあるようだ[7]。脅迫や嫌がらせほど深刻でなくとも、企業の利益に合った研究成果が出てしまう。たとえば、受動喫煙に有害な影響がないという論文の74％はたばこ産業と関係のある研究者によって書かれ、関係のない研究者の書いた論文で同じ結論に至ったものは13％しかないそうだ[8]。ボックは、中立であるべき学者や大学の研究への信頼が崩れることを懸念しており、その危機感はストレートに伝わってきた。

市場原理になじまない分野の現実

アカデミック・キャピタリズムをめぐる研究は、私が読んだ限りでは、特許化が視野に入る科学技術分野を念頭に置いて論じているものが多く、文学や哲学や歴史学などのリベラルアーツの領域の市場化を検討したものは見たことがないが（文献を網羅してはいないので、あるかもしれない）、5年ほど前に文学部廃止論がマスコミ上で盛んに取り沙汰された際には、この市場原理の枠組みが適用され、投資対象としての価値（卒業後良い就職につながるか、企業は学生を採用する価値があるかといった、投資にみあう収益が見込めるか否か）がさかんに

議論された。

理系でも基礎研究や周辺領域の状況は同じである。医者になった私の友人によれば、医学研究者としてやっていけるかどうかは研究費があるかどうかで、つまり、配属された医局の予算の規模で決まるのだそうだ（それは桁数の問題なのだそうだ）。研究能力は二の次で、どれだけ規模の大きい実験や治験ができるか、どれだけ高い機器を買えるか、それに尽きるという。難病の研究など、被験者が十分に得られず、新薬を開発したところで大きな市場がない領域では研究費を取れない。理学部の研究者も同じ話をしていた。基礎系の研究室は企業からの連携の話もないし、学生の人気もなくなってくる。しかし淘汰されてはいけない分野であることは間違いないと。農学系のある研究室では、毎年担当を決めて、一人の教員が年中次から次へと外部資金に応募して、研究室全体の研究費獲得に自転車操業であたるのだそうだ。大学から給付される研究費では国内の学会に一度行くと無くなってしまうから、学生が卒論を書くための実験に使う薬品代などにあてるのだという。

教育の質を上げるために、教育に従事しないポストが増える

これは外部評価が大学に入ってきたころから言われていたことだが、「教育の質を保障しそれを外部に説明することで学生の教育を向上させる」ために、教授研究職以外のポストが増えるという逆説が起こる。学生を実際に教え、教育研究に直接の責任を持つ教授研究ポストは減る一方なのである。私が勤務する大学でも、この５年で、産学共同を推進するためのスタッフが多く雇われ、そのスタッフが入る立派なビルが新しく建った。研究のための資金は「自分で外から取ってくる」のがノームである。文系の我々には科研費がある（まだこのお金には「中立」のラベルが貼ってある）が、地方自治体や地元の企業が公募するもの

や委託事業などに対しては、正直なところ躊躇いもある。

新しい教育プログラムの是非をめぐる議論にしても、それが大学や学部や部局のミッションに照らし合わせてという議論の前に、「お金があるかないか」に話が落ちてしまう。「お金を取ってきさえすれば文句を言われない」のだが、そして新しい試みもそうすれば可能になるのだが（私もこの手は使うことがある）、それは、皆で共通の価値や目的を確認し、実現するための仕事ではない。

出資企業の意向に合わないデータを公表できないことや、研究の内容を口外できないことは、研究中に同僚たちと自由な議論をすることができないということである。これは、大学なのかと思うのである。知の共同体ではなく、単なる物理的空間が切り売りされていて、そこに個別の分野の研究者が間借りしているだけで、利潤の追求を一体になって追及する企業体にもなっていない。かつて分野の専門化が過度に進んで、隣の研究室にいる教員が何を研究しているのかも知らないといった状況を揶揄して、大学は「ユニ」バーシティではなく「マルチ」バーシティであるという批判があったが、それでもまだ、その大学に雇用されている同僚という認識はあったのではないかと思う。今は学部資金を獲得して雇用を継続している教職員がますます増えていて（個々の人は良い人たちで、それぞれに生活を守らなければならないけれど）、市場原理に紐ついた外部資金が入ってくると大学内は分断していき、息苦しさが廊下の角で増幅しているように思うのだ。そしてそれを推進するしか道がないとしても、なんとかして大学のコミュニティを取り戻せないものだろうか？

大学の外でできることと、大学の内でできること

歴史を概観すれば、学問には常にパトロンが必要であった。「学問の自律性」が自明に見えた時代というのは、歴史的に見れば戦後の数

十年だけのような気がする。大学が、学問や文化が花開くまで一つの分野を何十年、何百年と守ってきたかというと、そうでもない。たとえばルネサンス前後の人文学は、それを担った人たちは大学で学んだ経験を持っているが、その果実が花開いたのは大学の外であった[9]。ひとつは、学生に種をまいて、外で咲かせてもらうことだ。

もうひとつは、大学の中で新しい自治を模索することである。教育研究費の圧倒的な割合を占めるのは、まだ運営交付金である。それはアメリカでも同様である。競争的資金と運営交付金を、うまく配分できないものかを考えている。

私がまだ大学生だった時に出版された北村薫『六の宮の姫君』[10]には、大学4年生になった主人公が（彼女が博学の落語家とともに、日常の不思議な事件を解決するシリーズである）、出版社でアルバイトをすることになるのだが、そこの社員が、ベストセラーをひとつ生むことができたら、売れないが本当に価値のある本をその利益で出版できる、そうやって作家を守るのだと主人公に語る場面がある。このような仕組みを、大学は作れないものだろうか？ 私たちで、私たちが本当に守るべき学問を内部で守る仕組みがあればよいと思う。今は市場原理を前にして、すべての学問が横並びにされ、外部資金を獲得できる学問こそが偉いのだという外部の基準までダイレクトにやってくるが、それは外向きに説明すればよいことであって、文学部や基礎科学をつぶしてはいけないことは大学にいる者は基本的には合意しているのだから、そうしようではないか。法人化した大学には、その権限はあるはずなのである（もちろん、大学債の発行という手もあるにはあるわけだが）。

注）

[1]上山隆大（２０１０）『アカデミック・キャピタリズムを超えて』ＮＴＴ出版.

[2]S.スローター，G.ローズ（2012）『アカデミック・キャピタリズムとニュー・エコノミー　市場，国家，高等教育』法政大学出版局，pp.188-191.

[3]上山，前掲書，pp.276-277.

[4]上山，前掲書，pp.234-235.

[5]上山，前掲書，p.4.

[6]デレック・ボック（2004）『商業化する大学』玉川大学出版部.

[7]たとえば、山田剛志（2020）『搾取される研究者たち―産学共同研究の失敗学』光文社新書.

[8]ボック，前掲書，pp.79-80.

[9]安藤義仁・ロイ・ロウ（2018）『「学問の府」の起源』知泉書館.

[10]北村薫（1992）『六の宮の姫君』創元社.

＊ここでは、アカデミック・キャピタリズムの歴史や理論を網羅することはできませんでしたが、既にかなりの研究の蓄積があります。読者のみなさんの関心に応じて文献を読んでいただければと思います。

＊また、寄附金についても今回は言及していません。機会を改めて取り組んでみたいと思います。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（74）

成女学校→成女高等女学校

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

初代校長
吉村　寅太郎

明治32年11月、吉村寅太郎を設立者として東京市麹町区中六番町（現千代田区麹町）に成女学校が開校した。吉村は前号に書いたように慶義義塾の出身で官立広島英語学校校長、第二高等中学校校長をへて東京女学館の第2代館長になったが女学館内の紛争に巻きこまれ辞任した。吉村の語るところによると一緒に女学館を辞めた主事（教頭格）の水谷直孝が女子教育に強い志を持っていたので、二人で女学校をたてようとしたところ、たまたま吉村の自宅の近くに荒れ果てた空家があったので、その家を借りて成女学校をたてたという（吉村寅太郎「追懐と希望」成女九十年史）。この荒れ果てた屋敷を応急の手当てをし、一室に畳を敷き、古道具屋で買い求めた教具で形を整え、やっと集めた8人の生徒で11月1日、開校した。その年の『婦女新聞第6号』に次の紹介文がある。

成女学校、この校は本年初めて開校したるものにて校長は元虎門女学館長なりし吉村寅太郎氏なりと聞く。吉村氏は女学館の主義、日に西洋風に傾き我国固有なる女子の美風を失ふを嘆じ遂に辞任して単独にこの校を設立したるなりと。さればこの一事以て校風のある処を知るに足らん。現今生徒の数は甚だ多からず。従うて校舎は不完全なる假舎なれども学校の精神に於ては決して堂々たる大女学校に劣らず、否、ある点に於ては遥かに勝れるを見る。即ち重きを家事経済の点に置きて成るべく浮華の風を去り、実用的な家婦を養成せんことを勉むるこれなり。便宜のため左に同校規則を掲ぐ。

位置 麹町区下二番地七十一番

束脩 金弐円

授業料 普通・技芸科各一円五十銭 専修科八十銭

入学程度 高等小学校卒業 但し裁縫専修科はこの此限にあらず。

「成女」の校名は漢籍に造詣の深い水谷直孝の発案で易経の「乾道成男坤道成女（天の道は男、地の道は女）」からとったものであった。

創立者
水谷　直孝

吉村寅太郎と水谷直孝の二人ではじめた成女学校であったが、翌23年には吉村の呼びかけで後に女子商業学校を創立する嘉悦孝子以下数名の女教員が加わり、高等師範学校教授の後藤牧太、文学者の高山樗牛、心理学者・高島平三郎等が課外講演をするようになった。ここにおいて校舎の新築を企てた。34年11月5日の「時事新報」は言う。

麹町区下二番町成女学校は吉村寅太郎氏の設立に係り女子に適切なる学術技芸を教授し力めて着実なる方針を取るよしにて目下百三十餘名の生徒を収容するも其校舎は旧旗本屋敷を假用するを以て設備の不完全なる点少からず。依て校舎新築の計画をなし目下寄付金募集中にて成功の上は一層面目を改むるよし。

募金は思うように集まらなかった。しかし生徒が増加するのでわずかな金額で敷地内に二階建二教室18坪の新校舎を建てた。しかるに時を同じくして吉村寅太郎が第四高等学校長になって金沢に赴任したので後事は水谷直孝主幹、嘉悦孝子幹事、宮田修学監の3人に託された。36年12月、吉村の知友で帝国大学出身の代議士、山根正次が第2代の校長になった。

明治39年7月、新校舎建設の目処（めど）がついたので牛込区市ヶ谷富久町に千余坪の土地を得て新校舎を建て41年9月、「高等女学校令」に準じた「成女高等

女学校」と改称した。これを機に2代校長、山根正次は辞任し、学監宮田修が第3代校長に就任した。41年の「婦人画報・増刊女学校画報」に次の紹介がある。

私立成女高等女学校……敷地総坪数は千餘坪にして内七十餘坪を寄宿舎に宛て残りを校舎と運動場とに分てり、校舎を別ちて十三室とし、階上四室の内一を講堂とし、之に隣りて裁縫室あり、規則1、修業年限五カ年とし学年は四月一日より翌年三月三十一日に終る 2、入学するを得る者は尋常小学校第六学年の課程を卒へたる者。3、入学料金弐円、一ヶ年金弐拾四円、随意科手芸一課目一箇年金参円、校費一箇年金弐円四拾銭

新校長の宮田修は明治31年、東京専門学校（早稲田大学）文科卒業後、奈良畝傍中学校に勤務したが34年、成女学校に迎えられた。宮田は昭和戦前期まで府立第一高等女学校長・市川源三、三輪田高女学校長・三輪田元道と並んで東都高等女学校長の権威とされた人物である。

第三代校長
宮田　修

成女学校が市ヶ谷の新築校舎において成女高等女学校になり、宮田修が第3代校長になって学校の行末に安堵したのかこの学校の創立者の一人・水谷直孝が息を引き取った。明治41年9月14日の『東京日日新聞』は次のように伝えている。

終生独身を守り一意教育事業に尽瘁したる牛込区市ヶ谷富久町成女高等女学校理事・水谷直孝氏は予て肋膜炎に罹り療養中なりしが、薬石効なく遂に一昨日午前六時半不帰の客となれり、氏は明治十二年東京師範学校を卒業し、福島、岩手、北海道等に奉職しし、三十二年十一月、吉村寅太郎氏と計り麹町区下二番町に成女学校を創設し専ら女子教育に尽瘁せしが、情質極めて清廉にして金銭上の事には更に目も呉れず五十年の久しき独身にて暮したれども嘗て寂莫を嘆ける事なく常に人に向かって学校が我が分身なりと言ひ、其生徒を

愛することも極めて厚かりしかは、生徒は一人として其徳に服せざるものなく先頃氏が片瀬に転地療養せし時にも生徒及び卒業生等より尠からざる見舞の金品を贈りて慰めたるのみならず、卒業生なる鈴木夏子の如きは良人の許を得て看護に趣きたるは当時紙上に記せし処なるが、斯くも氏を慕へる生徒等は其訃を聞いて悲嘆遣る方無く終に校葬を以て葬らんことを議し、明後日午後一時同校出棺、牛込神楽坂善国寺に於て葬式を営み、谷中墓地に埋葬の筈なるが、当日は同校卒業生及び職員生徒数百名葬列に加はるべく造花は昨今生徒に製作せしめ居れり。

大正3年刊行の『全国学校沿革史』に「私立成女高等女学校」はこうある。

教育制度は大抵高等女学校令に依りしが、繁簡宜しきに従ひ努めて自主自治の気風を養ひ質素の良習を尚びたり、殊に学課中最も力を用ゐたるは外国語（英語）にあり。是れ当時女子教育の隆運に向かはむとするの兆しありしに拘はらず語学を修めむとするには基督教主義の学校に入らざるべからず。而かもこれ在来の我が国一般の家庭に於ては好まざることなれば本校は宗教的臭味を帯びずしてこの勃興せむとする進歩的女子教育に満足を与へむが為めに力を用ゐたるなり。……現在校長宮田修氏にして現在職員は校長以下二十名、生徒数三百名、創立以来の卒業生の総数五百三十名、今は創立者十五周年にして基本財産も若干あり。

第2次大戦中、空襲で校舎が全焼したが、戦後、学校法人成女中学校高等学校として東京都新宿区市ヶ谷富久町に伝統を継いでいる。

参考文献

『成女九十年』

東京帝国大学学友会緑会の活動模様
― 『緑会雑誌』創刊号（1928年3月）から ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

このたび古書店より廉価にて、東京帝国大学学友会緑会『緑会雑誌』創刊号（1928年3月）を入手することが出来た次第である。緑会は、東京帝国大学法学部教職員・同大学法学部在学生・同大学法学部卒業生有志を対象会員とした東京帝国大学学友会の1つであり、法学部長を会長としている。会長が数名の評議員を教職員より嘱託し、委員は在学生より出身高等学校ごとに推薦（学生委員選挙）されて任命される。緑会は、「法学部学生生活ノ向上ヲ期ス」ことを目的として、「会員相互ノ親睦」交流をはかるため、緑会の大会、小集会、講演会、研究会、見学旅行、会誌の編集発行といった事業を行うものとされる。

『緑会雑誌』創刊号に記されている、緑会の活動模様については、まず緑会大会が1927年11月24日に明治神宮外苑大日本青年会館で、若槻礼次郎「最近の財界変動の与へたる教訓」などの講演や会食を交えて行われている。同上号の記録（横田委員）では、「満場の期待を受けて壇上に現れた若槻氏は大先輩の親切から得意の健辯更に熱を加え、滔々今次の財界変動の過程と現状を継述し、懇々五ツの教訓を語つて吾等を啓発する所頗る大なるものがあつた」（105頁）とし、その後会食となり、「若槻氏を中心に献酬頻りなる先生方の傍らでは、会費の豊富に恵まれた学生が、盛り沢山な馳走を前に、ビールの満を引いては刻一刻とメートルを上げて行く」（同頁）とある。新会長となった中田教授が酒宴のスピーチに立ち、「『法制史の研究にかけては私かに世界的学者を以て任ずる私も、テーブルスピーチは全然駄目でありまして』と出られる処、全く鮮やかな御手際である」（105～106頁）とも記されている。

小集会の記事も、同号には教員ごとの小集会記事が学生委員らの手により、17つ挙げられている。その内の幾つかを、以下に示しておきたい。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

我妻先生小集会（1927年5月23日、荻原委員）：先生は現代大学生、勉強の態度、殊に試験に追はれて皮相的なる研究態度に走る感あるに鑑みて、ケースメソード風な演習を開く意思を有せらるる事を話された（107頁）。

田中先生小集会（1927年6月1日、杉山委員）：先づ法律学研究に対する覚悟に就てお話しあり。後学生諸君の商法に付いて質問に答へられた。大学生活には在学中何か特徴を附くべきことを特に御注意があつた。五時散会（108頁）。

河合先生小集会（1927年6月20日、牧野委員）：当日先生は『読書に対する感想』と題し得意の熱弁を以て我々を深く感銘せしめた。次に雑談に移るや議論百出遂に事リベラリズムに至るや名残尽きざるに定刻となる（同上頁）。

松岡先生小集会（1927年6月26日、高木・荻原委員）：先生の三十五年の司法官生活を顧みて将来司法官たらんとする学生に対し、極めて懇切なる指針を示された。先生は裁判所、法典編纂委員等御多忙の為め寧日なく特に貴重な日曜日を割愛して御出席を御快諾下さつたのである。此御厚意に対し本会は深く感謝するものである（同上頁）。

中田先生小集会（1927年6月27日、三木委員）：先生の学風を慕ひて相集ふ真摯の者十数名、法制史の「死者分に就て」のお話があつた。お話の後法制史上、歴史上のことに付て色々学生は質問したが、蘊蓄の一部を傾けられた（108～109頁）。

野村先生小集会（[日付記入なし]、酒井・隅野委員）：先生がまだ学生であられた頃、高等文官試験を受けられた時の思出話を聞せて下さつた。先生も高文にはなかなか苦心された由、その軽妙なお話し振りと共に、学生等を笑はせられた(109頁)。

蠟山先生小集会（1927年10月5日、三木委員）：特別の題目に付てお話なく、漸次在外中の御感想を語られた。特筆すべきことはどの先生も云はれる様に学生相互、学生と教授間の意志の疎通を欠けること、それに引換へ英国では学

生は卒業の一年前頃より教授から全人格的な指導をうける制度があり好成績を収めているとのことだつた（同上頁）。

鳩山博士小集会（1927年12月14日、姫野・牧野委員）：先生の名は雷の如く響き渡つている。一度先生のお話を伺ひたいと望んでいた。当日民法の諸問題に付てお話しがある筈だつたが、都合と時間がないため学界より社会に出ての御感想を述べられた。法律に対する着眼点、自信と自惚、素質と努力、等々、当日先生の風貌に接せんとする者多く人員二百を越え、小集会が大集会となつた。先生はあんなむつかしい本を書く人とも思はれぬ親しみのある人である（110頁）。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

緑会の雑誌は、関係者の間では「古くから幾度計画され幾度もくろまれたかもしれない」（隅野令二雑誌部委員、98頁）というが、「今や全学の要望に促がされ、緑会委員の智慧と勇気とによつて、緑会雑誌がとうとう物になつた」（穂積重遠教授、3頁）としている。創刊号の巻末附録には「昭和二年度法学部試験問題」（126～136頁）や「昭和二年度高等試験問題」（137～141頁）が掲げられていて、在学生らの要求にもしっかり配慮対応している。

※左下の写真：緑会大会での若槻講演　　※右下の写真：鳩山博士の小集会

講演の民親若る於に緑会大会

会集小士博尖鳩山

学校資料の教材化を模索して⑱

―「学校内に博物館を作ろう!」を事例に―

八田（はった） 友和（ともかず）（クラーク記念国際高等学校 ）

1. はじめに

これまでのニューズレターでは、学校資料の活用に主眼を置いてきたが、本稿では、「学校内に博物館を作ろう!」という提案をしたい。例えば、横浜市は博物館デビュー支援事業として、校内に博物館を設置する活動に取り組んでいる。この事業では、博物館本来の役割や博物館がもつ資料の多様性などを通して、学校や地域とともに現代の子ども達や未来の子ども達へ、横浜の歴史とそこに暮らした人々の知恵や文化を伝えることを目的としている。[1)]

本稿では、横浜市や各地での先行実践事例等を踏まえ、学校内に博物館を開設する際の手順として、大まかな手順と指導案を整理・提示する。[1)]

2. 学校内に博物館を作る手順

学校内に博物館を作る手順として、次のスケジュールが想定される。

① 学校内で資料を発見する・収集する

→社会科教材室・理科室・校長室などに所在するケースが多い。

また、教員が持っている資料で提供可能なものがあれば、併せて連絡してもらうことで、資料の充実に努めることができる。

② 空き教室に資料を集めると同時に、近隣の博物館（学芸員）に連絡する。

→資料を扱うプロである学芸員と保存方法や展示方法などを共有する。加えて、協力者を集めて組織作りも同時に行うことが求められる。

③ 学芸員と博物館開設のスケジュール等の予定を立てる。

→資料の量、確保できる時間等によって、スケジュールの立て方が変わるため、詳細は学芸員と相談の上、決定すると良い。

また、①～③の学習過程を行うと同時に校内の組織化作りも併せて行うことで、博物館開設後の運営がスムーズに進むと思われる。

（1）年度当初に各委員会活動の担当者を決める際、博物館委員や資料館委員なるものを設置することで、教員が異動しても博物館が生徒によって後輩に受け継がれていく。そうすることで、異年齢交流や委員会活動の活性化にもつながる可能性を秘めている。

（2）校内の組織体制の構築である。（1）において、生徒間の組織体制の構築が可能となる。それに加えて、それを主導する教員の組織体制を同時に構築する必要がある。専門的知識をもった教員や地域連携担当教職員等を博物館（資料館）担当教員として校務分掌に位置付け、その教員を中心に博物館設置の企画から運営までを円滑に行う組織体制作りが求められる。

3. 授業の流れ　※1時間構成ではない

時間	学習内容	生徒の活動 （〇発問・指示、・予想される回答）	教師の指導・留意点
導入	1. 資料の確認	〇学校資料を探してみよう ・校内の社会科教材資料室や校長室など、資料がありそうなところに探しにいく。	資料の触り方等のレクチャーを行う。

展開	2.資料の概要把握	○どんな資料か調べよう！ その資料が当時、どのように使用されていたのか、インターネットや図書館、博物館を使って調べよう。	わかったことは、ワークシートにまとめるように指導する。
	3.フィールドワーク	○話を聞きにいこう！ 地域にフィールドワークに出て、資料がどのように使用されていたのか聞き取り調査を行う。	事前に、聞き取り調査をする上での礼儀やマナーについて事前学習を行う。また、聞き取り調査の際、聞いた内容を資料の調べカードに記入していくように指導する。
	4.中間まとめ	○調べたことをまとめよう 自分たちが調べたことを壁新聞やワークシートにまとめる。	
	5.資料の展示	○資料を展示しよう！ 調べた内容をもとに、空き教室に学校内博物館をつくってみよう！	実際に博物館をつくる際は、博物館(学芸員)や地域の人の協力が得られるようにする。
まとめ	6.本時のまとめ	○校内博物館が完成した後ワークシートに取り組んだことや感想をまとめる。	継続的に学校内博物館を活用した授業実践を行うことを伝える。

4.さいごに

本稿では、学校内に博物館を作る際の過程や留意点について、整理・提示を行った。

本実践は、子どもたちを対象に行うことはもちろんのこと、教材研究や教材開発の意味合いを込めて、教員同士で行うことも有効であると考えている。まずは、学校にある資料について、教員同士で理解を深め、その成果を子どもたちに還元することが有効な方策になるだろう。

なお本稿は、『みんなで活かせる！学校資料』（村野正景・和崎光太郎編）に掲載した指導案等に加筆・修正を行ったものである。

【謝辞】

本実践を行うにあたりまして、公益財団法人滋賀県文化財保護協会の鈴木康二氏にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

【註】

1）学校内博物館をつくる・活性化する取り組みとしては、横浜市歴史博物館が中心として行っている、「博物館デビュー支援事業」が顕著である。

https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/taisyou/school/debut/

【参考文献】

・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック－』学校資料研究会

・島田雄介・神野晋作・八田友和2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第64巻3号pp.10-19

・和崎光太郎・村野正景（編）2020『シンポジウム 学校資料の活用を考える－学校資料の価値と可能性－Ⅰ・Ⅱ講演録』京都歴史文化クラスター実行委員会

・文部科学省2019『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説－地理歴史編－』東洋館出版社

・横浜市歴史博物館「博物館デビュー支援事業について」
（最終確認2020年5月6日）
https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/taisyou/school/debut/

明治後期に興った女子の専門学校（29）

帰国後の津田梅子

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治15年11月半ば、津田梅子は山川捨松とともに11年ぶりに帰国した。麻布新堀町の家に着いた梅子は、日本語をすっかり忘れて挨拶もできず、父と姉が通訳するといった具合だった。

女子英学塾創立 1,2 年前の津田梅子『津田塾六十年史』より

開拓使は15年2月に廃止され、梅子や捨松は文部省の管轄になっていた。男子留学生にはすぐに大学や官庁の仕事が与えられるのに、女性の二人に国は何も用意していなかった。しばしば文部省を訪れ仕事を要求したが、日本語の読み書きが不自由なため仕事はなかった。永井繁子の家で愚痴をこぼす日々が続いた。

1年先に帰国した繁子は、音楽取調所（東京音楽学校の前身、現東京芸術大学音楽学部）の助教授となってピアノを教えていた。言葉は不自由でも実技が中心であるためなんとかこなせた。繁子は、捨松と梅子の帰国を待って、15年12月、米国で知り合った海軍士官瓜生（うりゅう）外吉と結婚した。捨松も苦悩の末、翌16年秋、18歳年上で幼い3人の娘がいる陸軍卿大山巌と結婚した。

一人取り残された梅子は、メソジスト派の海岸女学校で教えたが、2ケ月ほどで辞めた。日本人蔑視の態度をとる宣教師が多く、ミッションスクールで教えることに気持ちが進まなかった。アメリカでは婦人会の活動が盛んになっていたが、日本の女性の行動は依然として家庭内に限られていた。梅子は失望した。そんな梅子に救いの手を差し伸べたのが後に初代総理大臣となる伊藤博文だった。16年11月3日、井上馨外務卿の官邸で行われた天長節の夜会に、梅子は帰朝者として招かれた。12年前、欧米視察使節団の副使だった伊藤から声をかけられた。梅子は“活躍の場がなくて困っています”とでも訴えたのであろうか、後日

伊藤から父を通して“御用邸に来て妻の通訳や娘に英語を教えてほしい。”と、話があった。梅子は快諾した。伊藤家は明るく、訪問客が絶えなかった。伊藤は忙しくても夕飯後家族と団欒した。伊藤は人の意見に耳を傾け、時代を見抜く鋭い目を持っていた。伊藤のはからいで17年2月ごろから下田歌子の桃夭学校で英語を教え、歌子から読書と習字を習うようになった。半年後、母が身重になり家政を助けるため伊藤家を辞したが、後の寄宿舎生活のヒントになった。

伊藤の推薦で、18年9月、梅子は華族女学校の教授補に任じられ、英語を担当した。同時期に開校された明治女学校でも、英語、地理学など教えた。時は鹿鳴館時代（明治16～20年）の全盛期を迎えていた。華族女学校でも在校時は洋服を用い、英語が重視され、卒業式には生徒が英語で謝辞を述べた。しかし、大部分の生徒は、意志も知力も弱く、研究心を欠き、厳しい指導はできなかった。

21年6月、華族女学校の招聘を受けて、アリス・ベーコンが1年契約で来日した。大鳥圭介校長から相談を受けた梅子が推薦した。アリスは、捨松のホストファミリーレオナルド・ベーコンの末娘で、梅子とも幼なじみであった。梅子は、麹町紀尾井町に家を借り、アリスと一緒に住んだ。この時、華族女学校の生徒を2、3人預かっている。これも後の寄宿生活の下準備となった。6歳年上で、学歴も先輩のアリスに梅子は悩みを打ち明けた。繁子も捨松も結婚した。梅子にも結婚話があったが、結婚よりももっと大切な問題があると感じていた。何のために開拓使が10年も留学させたのか。教壇に立って3年、英語教師として知識を教えるだけでは満足できなかった。何か専門の研究をしてみたい。天分を伸ばしたい。アリスは思い悩む梅子に再度の留学を勧めた。

22年7月、24歳の梅子は、米国フィラデルフィアの親日家メアリ・モリスの尽力により、ブリンマー女子大学に留学することになった。伊藤の口添えもあり、華族女学校在官のまま2年の留学を許可された。ブリンマー女子大学は、創立4年目で150名ほどの小さな大学だが、厳格な教育、堅実な学風で有名であった。選科生として、当時米国学界の流行でもあった生物学科を選択した。

梅子はこの留学で大きな収穫を得た。アリスの著書『日本の少女と婦人』をまとめる手伝いをして、客観的に日本の女性について考えた。留学1年半後、オスウィゴー師範学校で、ペスタロッチの直観教授法に基づく開発的教授法を学んだ。留学延期の願いを出し、ブリンマー女子大学に戻って研究を続け、「蛙の卵の軸の定低」という論文を完成させた。さらに自分と同じように日本人女性が高等教育を受けられるように「日本婦人米国奨学金」を設立した。梅子は、修めた学科すべてにおいて優秀であり、大学で研究を続けてはとの誘いを受けた。しかし、将来日本女性のためにやらねばならないことがあると帰国を決意した。

25年8月帰国し、華族女学校勤務に復帰した。行き過ぎた欧化政策の批判から国粋主義が台頭していた。27、8年の日清戦争勝利後、好景気と相まって女子教育が振興し、高等女学校の設立が相次いだ。成瀬仁蔵が女子大学設立を企て、30年3月、帝国ホテルにおいて創立披露会を華々しく催した。女子の高等教育の気運が生まれようとしていた。

31年5月、梅子は女子高等師範学校教授を兼任した。同年6月、思いがけないチャンスが訪れた。大隈重信や伊藤博文からの依頼で、米国デンヴァーで開かれる第4回万国婦人連合大会に、華族女学校同僚の渡邊筆子と、急遽出席することになった。6月24日、梅子は約3千人の聴衆を前に5分間の挨拶をし、“やがて日本女性に発展期が訪れ、真に対等の資格で男性のよき協力者となる時代が来るであろう。”と結んだ。

大会後の8月、梅子はマサチューセッツ州のレンサムにいる18歳のヘレン・ケラーに会いに行き、2、3時間会話した。ヘレンは幼児期の熱病で盲・聾・唖の三重苦を背負ったが、7歳から家庭教師アン・サリヴァンの教育を受け、梅子が会った前年に、ラドクリフ・カレッジ（現ハーバード大学）の予備試験に合格していた。ヘレンは梅子の唇に指をあてて話を聞き取り、口ごもった声で返事をした。ヘレンの奇跡は、サリヴァンの熱心の力と誠意によるものだと確信した。負けず嫌いで探求心旺盛なヘレン。二人に教育の原点を見たのであろう。

さらに英国の名流夫人等から招待された。渡邊は健康上の理由で辞退し、11月、梅子は単身渡英した。半年間の英国滞在中に、聖人のようなヨーク大僧正や、80歳で20年来病床にありながら、活々とした眼差しのナイチンゲールにも会うことができた。オックスフォード大学での聴講や読書も存分にでき、自信を得て32年7月帰国。この31、2年の出会いや学びが、梅子の背中を押した。

梅子は、32年暮年俸800円、33年1月従6位に叙せられた。しかし、学校開設の意志が固まり、同年1月、アメリカへ伝えた。メアリ・モリスは、同年3月、梅子の学校を支援する「フィラデルフィア委員会」を立ち上げた。同年7月、華族女学校及び女子高等師範学校教授を辞任した。

外国人が設立したミッションスクールでは、日本の事柄の勉強が不足する。西欧の思想を学ぶためにも日本人の手で英語を十分に教える学校が必要であると考えた。33年、高等女学校は、官公私立52校、生徒約1万2,000人と、28年の約4倍の勢いで増えていた。機は熟した。こうして最初の留学から帰朝して18年、教員となって15年、苦悩と熟考の末、梅子は学校創立に踏み切った。

参考文献

『津田梅子』吉川利一
『津田英学塾四十年史』『津田塾六十年史』『津田塾大学100年史』
『津田梅子文書』

カレッジノベルの研究への道（20）
：久米正雄「受験生の手記」（11）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、「受験生の手記」を恋愛譚という側面から検討してきた前号までの内容を総括する。

この小説の最後には後日譚として、「澄子と弟との恋愛も、その中に破れて了つた事である。どうせ澄子のやうなコケティッシュな女だから、さうあるべきとは想像がつくだらうが、念のため付け加へて置く。」という叙述がある。これに従えば、澄子のコケティッシュさが破たんの原因と理解できる。これまでにも何度も検討してきたが、はたして澄子はコケティッシュな女性なのか。

まずは、コケティッシュという語の意味を確認しておこう。試みに辞書を紐解けば、「なまめかしく色っぽいさま、男の気を引くような様子」（『大辞林（第三版）』）とある。この小説の中で澄子のなまめかしさや色っぽさが強調されることはほとんどないが、後者については頷けないことはない。

実際に健吉は澄子の手紙に狂喜乱舞し、外出の同行を頼まれればホイホイと応じてきた。男をひきつけ振り回せるだけの器量のある女性であるとは言えそうである。しかも、健吉に手を握られるも手を離したときにも、後日の弁解ではびっくりしたもののうれしかったのだとまで言ってのける。そう考えれば、澄子はコケティッシュな女性と言えないこともない。

しかし、男が欲しいだけならば、誰でもよいはずであるが、澄子はなかなかに男を選んでいる。健吉が初めて澄子の手を取ったのは一高の記念祭のときだが、澄子たちはもともと一高の記念祭や家庭博覧会など、それ相応に文化的な香りのするイベントに足を運ぶような人々でもある。少なくとも誰でもよいと考えているようにはみえない。

端的に言って澄子はエリート男子が好きなようである。一高の記念祭で健吉の中学時代の同級生の案内を健吉が断った際には、案内してもらえばよいのにと言ってしまう。浪人中の健吉の前ですでに一高に入った同級生に案内してもらえばよいと主張するのは、あまりにもデリカシーに欠けている。健吉の姉は澄子をして無邪気と言うが（あくまで健吉に注意を促しただけで、本当に無邪気と思っているかは疑問が残るが）、仮に無邪気なところがあるとするならば、こういうところだろう。

このような点を勘案すると、澄子はStatus-seekingと評する方が適切である。しかも、健次との関係を考えても、そう言えるのではないかと思われるのである。健次はたしかに兄を出し抜くことには成功しているのだが、一方で安全志向が強い面もある。健次が入学したのは一高の第二部である。家業である医者を継ぐ兄が第三部を志望しているのを見て、同じところに入るのは嫌だろうということで第二部を志望したことになっている。しかし、実態として第三部の方が入学するのは困難である。うまいことを言って自分が不合格の憂き目に遭うことを回避したと理解することも可能なのである。

つまり、健次は世渡り上手には違いないが、上昇志向は弱いということになる。Status-seekingな女性には少し物足りなさそうである。ただし、後日譚は結論が示されているだけなので、あくまで仮定の話である。

Status-seekingとコケティッシュは必ずしも等価ではない。もちろん一般向けの小説である以上、分かりやすい表現を使う方がよい。コケティッシュな存在として読者の目に映るだろうというのなら、必然的にそのような表現を使うことになるだろう。久米が大衆小説の作者として成功したことを考えればなおのことである。コケティッシュという語を使うことが妥当でないと言いたいわけではない。

しかし、久米自身もこのような澄子をコケティッシュと思っていたのではないかとも思われる。いくら読者におもねるとしても、思ってもいない言葉を使うのは、小説家としてあまりに不自然である。

むしろ両者を等価と見なしてしまうところに、当時のエリート男子（決してエリートとは限らないとも思うが）の女性への眼差しが垣間見えるように思えるからである。女性はいい男を捕まえるためには色目も使うということであり、端的に言って女性を下に見ているということである。しかし、このような点は、大正時代に書かれた小説ということを考えれば、致し方のない点でもある。

こと恋愛については、健吉は絵に描いたようなうぶな青年である。それは絶望的な凡庸さを生み出す契機となるとともに、多くの読者にある種の甘酸っぱさを感じさせる契機ともなる。

この作品が公表された時代に、高等学校入試のことを正確に理解しうる人は決して多くない。要するにエリートの実態は謎ということになる。しかし、そんな謎の存在も、人並みに色恋に翻弄されているのである。

その上、入試の失敗、失恋、遊郭での童貞喪失を経て自死してしまう。率直に言ってメンタルが弱すぎる。しかし、その弱さもまた、読者にとっては共感の対象となった側面もあるのだろう。

その意味で、恋愛譚としてこの小説を見たときには、謎の人種が凡庸な恋愛をするという点にこそ魅力があったということができる。通俗小説に長けた久米のなせる業といえば言いすぎであろうか。

久米自身、この小説のプロファイリングのよさを誇っていたことは、第６１号で触れた。受験の描写に関してはいささかプロファイリングに不足があるが、恋愛譚に関しては人々の心をつかめる設定という点でプロファイリングに成功したと評することができるのかもしれない。

戦後生徒会活動成立史の研究 ⑮
―『新制中学教育ノート 第3集』にみる生徒会論（2）―

猪股（いのまた） 大輝（だいき）（東京大学大学院）

前稿までの整理

やや投稿の頻度が空いてしまった。本稿は、前稿（第71号）の続編であるので、議論を詳細に確認されたい方は、そちらを参照いただきたい。

前稿では、1949年5月の発学261号において、生徒会を含む「特別教育活動」が教育課程内部へ「課程化」されたことを巡って、学校活動や広く教育活動全体の中における特別教育活動の位置づけを考察すべく、この課程化を主導した国立教育研究所の所員や文部官僚による研究会「中学教育研究会」より発刊された『新制中学教育ノート 第3集』第1章「特別教育活動の性格」の分析を行った。同稿は戦後の「課程化」へ至る歴史的展開と、概念的な目的、内容論を取り扱った内容であった。

本稿では、以上の分析に続けて、同書第2章、石川智亮の手による「学校の全体企画と特別教育活動」[1]を分析していく。

特別教育活動のねらいと基盤

原稿「学校の全体計画と特別教育活動」の冒頭では、「日本における特別教育活動というものが、新しい教育制度下における中学校にとつては、具体的にどんな目標とどのような原理から、如何に運営されるべきであるかを詳述してみよう」（37）との問題設定がなされている。以下では、この構成に従いながら、まず同稿が明らかにしようとする目標・原理をまとめ、次いで具体的な運営法について記述を進めたい。

まず、日本における特別教育活動の目標と原理について。同稿でははじめに、戦後日本の教育の発展過程を「教科書中心から児童中心へ、そして更に生活中心へと発展し、最近では教育は生活でさえあるといわれてきている」（36）も

のとして把握する。また、この、教育と生活とを同一視するような見方を学校と地域社会との関係把握にも適用し、両者の「綿密な相互関係」を強調する。そして、以上のような理解のもとに、同稿は、学校を「単なる知識を覚えるための場」ではなく、「Learning by doing の意味の生活の場」となり、「生活経験、社会生活の訓練の場として〈中略＝引用者〉たえず生長しつづける生徒の生長と発達とを助長し、善き社会の一員たらしめる場」、あるいは「生徒の理解の上に立つて個々人の個性、特性を遺憾なく発揮せしめる事によつて与えられた人間性を全うさせる」（36）場として把握する。

このように、生活中心の原理に基づいて教育、ないし学校を理解する同稿では、教育の対象を、生徒の生活の一部－学校における教科学習の時間のみ－ではなくその全体、すなわち、「生徒の二十四時間生活」（39）にまで拡大して理解する。この理解に従えば、当然教科外である特別教育活動も学校における教育課程の内部において計画される必要があるし、また、学校外で行われる種々の生徒活動も「学校、社会の教育組織の緊密円滑な連絡」（39）によって全体の教育計画の中に組み入れられるものとなる。すなわち、同稿において、戦後日本における教育は、（特に地域）社会と学校とが連携しながら、子どもの生活全体を教育的に計画化し、活用することでなされるべきものと理解されている。

では、このような全体的な教育理解の中で特別教育活動はいかに位置づけられるのだろうか。この点について、同稿では、特別教育活動を、以上に見られる生長・発達の助長、社会人の育成、個性の発揮の3原則を達するための「理想的な生活経済の場を創ってやる」（46）ような活動として意義付ける。この「場」たる「特別教育活動」において、教師は、「個々人の個性、特性の伸長と人間性を全うさせる事であると同時に、生活経験の自己更新による個人の主体性と社会性とを確立させてやる」ような「Guidance」（41）を与えつつ、生徒の自発性に従って学校を生活＝教育のために好適な「楽しく通つてゆく楽園」（41－42）とし、また、「デモクラシーの精神」（41）を獲得するよう、計画的指導を与えていく

ことが求められる。そして、これらの指導は、上述したような地域＝学校で作られる全体的な教育計画を「基底」（44）にすえてなされる必要があるのであった。

特別教育活動の実際的内容

「学校の全体計画と特別教育活動」では、以上のような理論的な議論を経て、特別教育活動の実際的な内容に関する議論を展開する。同稿ではまず、特別教育活動を含む地域全体で立てられる生徒の活動計画について議論し、次いで学年ごとの計画について議論する。同稿の計画に関する議論をよりよく理解するために、以下に地域全体で立てられる活動計画について例示された計画案を掲出したい。ただし、全体を掲出すると長くなるため、主要な活動例を適宜抜き出して示す。

4月：入学式・ホームルーム区分・生徒会入会・学校紹介・地域の中の学校の意義を理解する・運動会などによって学校への興味を強める。
5月：生徒会役員選挙・憲法発布に際して、その意義を学習・社会教育団体、PTA などと協力し学校特別教育活動の連関を討議
6月：夏季の運動シーズンに備え、学校のクラブ活動の時間延長
7月：夏休みの活動について、学校討論会
8月：少年団キャンプの実施・少女団ハイキング・地域社会連合盆踊りなど
9月：ホームルーム対抗試合の実施・各研究会連合の研究発表
10月：1学期考査の結果に基づいた個人指導・読書週間
11月：文化の日記念事業・地域社会とともに交通週間の実施
12月：火の用心週間・新年についての研究
1月：学校映画界の開催・成人の日についての討議
2月：雪についての討議・四季についての研究
3月：学芸会の実施・卒業式（48−51）

以上の計画の特徴は、大きく次の3点に集約される。すなわち、①地域社会との連携が強調され、特に、少年団（ボーイスカウト）、少女団（ガールスカウト）など、学外の社会教育団体の活動も計画の中に含まれている点、②季節や祝日に応じた教育活動が目立つなど、生徒の生活への配慮が強調されている点、③特別教育活動、ガイダンス、地域社会における生徒活動が区別されず並列的に計画されており、それぞれに固有の領域が確定されていない点、の3点である。これら3点は、いずれも上述してきたような理論的展開に即したものであると言える。

また、同稿は、以上の案はあくまで仮案であって、「生徒の年齢とは無関係」な「学校全体の計画」であり、個別詳細なものが別途必要であること、更に、その内容も「地域社会の特性、環境の特異性がもつと考慮され」（51）て作られる必要があることを強調する。同稿によれば、以上のように個別具体的に配慮された教育計画と教科のプログラムを合わせ考えることによって「学校というものが旧来の象牙の塔的な行き方から地域社会の学校として生徒が何の拘束も意識せずに楽しく通つてくることのできる学校になる」（52）のであった。

まとめ

本稿では、『新制中学教育ノート第3集』の議論を分析するべく、同書の第2章、「学校の全体計画と特別教育活動」の内容を分析してきた。繰り返し言及してきたように、同稿では、生活＝教育という定式のもと、学校と地域社会が互いに緊密に連携しながら、全体的に計画を立て子どもを教育していく必要が唱えられてきた。こうした教育の中で、特別教育活動は、独立した象牙の塔的領域を持つものではなく、学校外の生徒活動をも含む全体の計画の中に埋め込まれ、指導されるものとして定式化されていた。

本稿で確認してきた議論は、今日、地域と学校の関係性を問い直す議論が盛んになる中で、既存の教科/特別活動/学校外という区分を再考するためにも注目すべき議論と言えよう。一方、この議論においては、個人と社会、あるいは子ども、学校、地域社会の予定調和的な合意形成がナイーブに前提視され、それら

が時として政治的に対立する可能性が捨象されている点など、実践的な課題も多い。この課題に関していかなる議論がなされていたかについては、別途歴史的検討が必要であろう。

次号では、『新制中学教育ノート』の議論をより深く検討すべく、別章の分析を予定している。

注

---

[1] 中学教育研究会編（1949）『新制中学教育ノート第3集―特別教育活動の理論【総説】』学校図書、35－58頁。なお、本文中、同書からの引用は（）内に数字を示すことで引用頁を指示する。

木下広次をめぐる史料（9）

― 曽根松太郎『当世人物評』にみる木下広次 ―

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

新型コロナウィルスの対応などのため、「木下広次をめぐる史料」シリーズが62号（2020年2月15日付）以来1年ぶりになってしまった。

今回取りあげるのは、曽根松太郎著『当世人物評』（金港堂、1902年）に掲載された木下広次の紹介記事である。

曽根松太郎は、著書『少年訓』（金港堂、1909年）、編書『教育論集』（金港堂、1902年）など教育分野での編著書があり、関連論文としては小熊伸一「曽根松太郎と「教育界」」（次回以降、この論文についても言及したい）がある。

『当世人物評』は、以下の人物についての12章から成る評伝集である。

西郷従道／井上馨／佐々友房／加藤弘之／浜尾新／菊池大麓／木下広次／沢柳政太郎／辻新次／田口卯吉／渋沢栄一／伊藤博文・大隈重信

1人について20頁ほどの詳しい評伝となっており、各評伝が雑誌の連載だったようである。取り扱った人物には、佐々友房、加藤弘之、浜尾新、菊池大麓、木下広次、沢柳政太郎、辻新次など教育関係の人物が多い。

以下、124頁から142頁に収録された「京都帝国大学総長法学博士木下広次君」の章から、主な内容を紹介していく。伝聞が多く、決して信頼性が高いとはいえない史料であるが、教具体的なエピソードが盛り込まれていて、広次を理解する何らかの手がかりになるかもしれない。

時習館と父華村からの影響

『当世人物評』では広次が熊本藩の藩校時習館で儒学を熱心に学んだことの影響を次のように強調している。時習館の居寮生とは、成績優秀者を藩の費用で寄宿させる制度であった。成績優秀な広次は後に熊本藩からの貢進生にも選ばれている。

◎彼れは嘉永四年正月二十五日を持って熊本に生れ、時習館の居寮生となツた一人で有る。
◎彼れの学問の根底は、此の時習館に於て作られ、其の青年時代の頭脳は、全く程朱の学を以て堅められた、彼れは法律を学んだから、法学博士となり、永く仏国の巴里に遊学したから、通常の漢学者の如く、頑固不通の人物ではないが、彼れの頭脳の根底は、此の時習館に於て受けた程朱の学に依て作られたので、今日と雖も彼れに面接して親しくその議論を聞く時は髣髴として昔の朱子学者の口吻を見ることが出来る[1]。

また、次のように父韡村が井上毅君、竹添進一郎などを教えた儒者であり、安井息軒や塩谷宕陰とも深く親交を結んだ著名な儒学者であったことを強調している。

◎其の青年時代に於ける熊本の風習、及び時習館の学風が、彼れに偉大の感化を与へたのは言ふ迄もないが、彼れは元来熊本の碩儒木下韡村先生の子息で有る。
◎韡村先生は当時天下に声名を馳せたる大儒で井上毅君、竹添進一郎君などは、皆其の門下より輩出した人材で有る[2]。

パリでの広次

『当世人物評』は、上記のように人格の基礎として儒学に深く触れた木下広次のパリ留学中の様子について、エピソードを交えて詳しく紹介している。

まず、パリで遊学した者は皆学問ができるという共通点があるが、真面目な学者と風流洒落な才子の2種類に分かれ、広次は真面目な学者の1人であったとして以下のように述べる。

◎伊藤侯爵が曽て我輩に向ひて、巴里育ちの日本人を評したことが有る、侯の見る所に依れば、巴里育ちの人は一般に学問が出来て、話が早やく分

かる、然るに其品性の点に至ると、二種類に分かれ、一は真面目な学者となり、他は風流洒落の才子となツて居ると言ふのだが、考えて見ると如何にもそれが事実の様に思はれる。

◎先づ巴里育ちの日本人の代表者として指を屈すべき西園寺侯、曽禰男、中江篤介、光妙寺三郎、小島龍太郎の諸君は、何れも学問が出来て、風流洒落の遊楽を好むオ子肌で有る。

◎然るに他方に巴里育ちの日本人の代表者たるべき松田正久、井上正一、熊野敏三、酒井雄三郎の諸君は、何れも真面目の学者と云ふ風で有る。

◎今我輩が月旦の題目として居る木下廣次君も、明かに真面目の学者となツた巴里育ちの一人で、西園寺侯などがカルチエ、ラタンの一隅に陣取ツて、盛に市内のカフエを荒らして居た時代に、木下君は最も熱心にファキユルテ、ド、ドロアに通学し、首尾克く之を卒業する迄、曾て其の品行を持ち崩すが如き事はなかツた人で有る[3]。

しかし広次には単に真面目なだけでなく一種の豪放磊落なところがあったとして、1000フランもの高額紙幣を便所の紙に使用したという以下のようなエピソードが紹介されている。

◎シカシながら彼れの性格は、決して巴里ツ子と相容れない者ではなかツたと見え、巴里人の口碑に残ツて居る彼れに関する逸話は、後年の留学生をして、彼れの意気に感ぜしむる者が少なくない。

◎其の逸話の一として、我輩の曾て聞いた事が有る、彼れは曾て里昂府迄旅行した時、ホテルに着するや否や便所に駈け入ツたが、用ふべき紙がなかツた為に、一千フランの紙幣を出して之を用ひたと云ふ話が有る、其の豪放磊落な意気は巴里ツ子の気に入ツたと見え、木下廣次が一千フランの紙幣を便所に用ひたと云ふ話は今以て巴里に於ける日本人の口碑に残ツて居るそうだ[4]。

『当世人物評』は、このエピソードを、広次の矯激さを伝えるエピソードというようよりは、広次が儒学を道徳的な基盤に置き続けながらフランスの学問を熱心に学んだことを示す実例であると位置づけて、以下のように述べている。

> ◎彼れは巴里の大学に在る間も、曾て日本の儒者の子と云ふ心を忘れなかツた、其の父の韡村先生が、「西洋の学は、利用厚生の学で有るから、倫理綱常の儒学を以て作られた人物が、之を学ぶは、其の智見を拡むる所以で宜しいが、単に利用厚生の学に心酔して、倫理綱常の儒学を忘れてはならぬ」と教へた旨趣を服膺し、利用厚生の学として、法律学を研究し、其の品性に至ては、往年程朱の学を以て作られた所と少しも変ずる所はなかツた。
> ◎一千フランの紙幣を便所に用ふるが如きは、聊か矯激では有るが、金銭を卑しめる当時の漢学書生の風習としては、敢て怪しむべき行動でもない[5]。

このエピソードは、広次が儒学の影響を強く受けていることと、真面目でありながらも柔軟な発想をしていたことを示唆していて興味深い。

次号では、この史料を引き続き紹介したい。

注

1 曽根松太郎著『当世人物評』金港堂、1902年、125頁-126頁。
2 同前掲書、126頁。
3 同前掲書、133頁-134頁。
4 同前掲書、134頁-135頁。
5 同前掲書、135頁。

体験的文献紹介(22)
―中等教育史を日本私学研究所の紀要・調査資料に書きはじめる ―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

1967年になったばかりのある日、日本私立中学高等学校連合会の幹部で成女高等学校長の中島保俊氏から新設の日本私学教育研究所の研究員にならないかとの誘いがあった。当時の私学中高連は進学率の上昇、学校増加の勢いに乗り、また公立学校の左傾化に対して文部省が私学に接近を計るのを逆手にとって文部省からさまざまな援助を受けていた。教育課程改訂については文部省の課長クラスとやり合って一歩もひかない強硬な態度をとりながら文部大臣や自民党の文教議員たちと交歓し多額の補助金を獲得するなど中高連の幹部は端倪（たんげい）すべからざる力量を持っている。中島保俊氏はその幹部で私学教育研究所をたてた功労者の一人である。当研究所は私学特有の教育研究と私学教員の研修を目的とするが文部省のさまざまな援助を受けて設立されたものである。中島氏はこの新設研究所の常任理事であった。中島氏はまた本ニューズレター44～50号に書いた教育制度等研究会の委員長であり、1967年のこの時はまさに高等学校教育課程改訂に対して私学中高連から文部大臣に対して改訂の要望書を作成するための諸案を検討している最中であった。当時、私は中高連の教育制度等研究委員会の副委員長で中島委員長を補佐する役目であった。中島委員長としては補佐役の私に新設の日本私学教育研究所研究員の肩書きを持たせたかったのであろう。

研究所は教育研究室のほか、国語科、数学科等の教科別研究室があり、国語科以下各研究室には一、二名の研究員が配されていたが、教育研究室には専任者がなく、倫理社会の研究員が兼任していた。そこで専任研究員に私が呼ばれたのである。私にとって願ってもないことであったが、すでに東京立正短期

大学助教授に就任していたので毎日の出勤はできないからと非常勤の研究員になった。

八王子市の郊外、浅川縁(べり)に建てられた日本私学教育研究所はかなり広大な敷地に研修室、理科実験室、研修者宿泊施設を整えた発展が望める施設であった。私にも教育研究室が与えられたが、研究蔵書がない。しかし私にとっては驚くべき数十万円の予算が示された。東京立正短大の女子教育研究所の場合と同じでそれを上廻る金額であった。早速、文京区茗荷谷の宣文堂を連日探訪し、教育学教育史の専門書を買い集めた。宣文堂の書架を次々に空(から)にしてゆく快感は忘れられない。留意したのは近代日本教育史研究の基本図書を収集することで、教育資料調査会の『明治以降教育制度発達史』全14巻、それに続く講談社の『近代日本教育制度史料』全34巻、宣文堂で復刻したばかりの『文部省第1年報』(明治6年)から『文部省第20年報』(明治25年)までの復刻第1期分等である。

就任するとすぐに研究所紀要に論文を書くように言われた。「高等学校教育課程改訂に関する要望書」作成の最後の段階であった。私は先輩が時折口にする戦前の中学校・高等女学校の教育課程について全く無知であったからこれを調査研究することにした。戦前の教育課程の変遷をわかり易く整理したものは前にも述べた文部省の『学制八十年史』の「資料編教育法規」である。明治19年の諸学校令以後は勅令の学校令にその学校の教育趣旨方針を示し、勅令に附属する文部省令に施行規則として教育課程表を載せている。ただし時折条文に省略があるから正確を期すには『明治以降教育制度発達史』によらなければならない。

かつて文部省には創立以来の学校関係文書が集積されていたが、1923年の関東大震災で烏有に帰した。それを憂えた文部省関係者が財団法人服部報公会の資金援助を受け、教育行政法の権威・九州帝国大学総長・松浦鎮次郎の指導のもと文部省内に教育史編纂会を設け、新進の教育史研究者の協力で1938年完成したものである。全14巻、『別巻索引』のうち、第10巻から第14

巻までは当時植民地だった朝鮮・台湾・関東州・南洋諸島の学校をとり扱っているが、第1巻から第9巻までは近代日本の教育制度史である。はじめに序論として上代より廃藩置県までの教育を略述し、以後は時期を次のように区切っている。

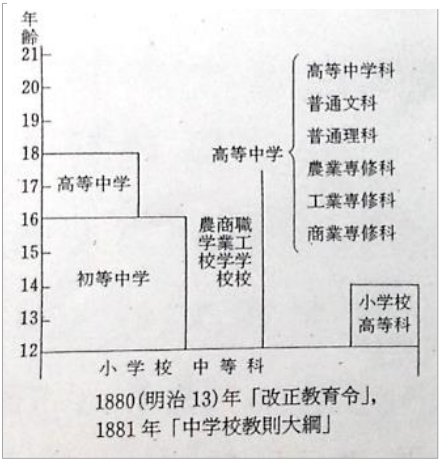
1. 学制頒布より教育令制定まで
2. 教育令制定より諸学校令整頓まで
3. 諸学校令整頓より日清戦役まで
4. 日清戦役より日露戦役まで
5. 日露戦役より世界大戦まで
6, 世界大戦より昭和7年（本書刊行時）まで

という構成で、各時期の区切りごとに詳細な学事統計を示している。日清、日露、世界大戦と戦争を境に区切るのは奇異に感じるが、当時の知識人の歴史センスがそのようであったし、事実、戦争が終わるごとに上級学校の制度改革が行われているから教育制度発達史として成りたつのである。

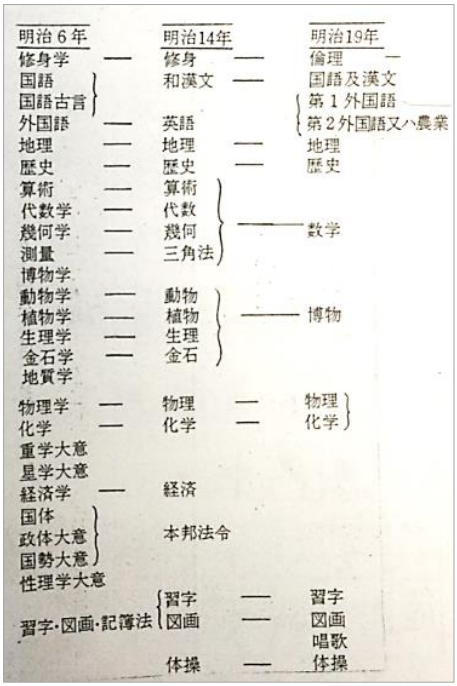
現在の中学校・高等学校教育課程の淵源をしらべようと志した私は、まず『学制八十年史』の資料編と統計表によって戦前の中学校と高等女学校の教育課程を「学制」「教育令」「中学校令」「高等女学校令」と年代を追って調べようと計画した。しかし『学制八十年史』は消略箇所が多いから『明治以降教育制度発達史』に拠れば周辺の規則や経緯までわかる。それでもまだ脱落箇所があったら内閣官報局編の『法令全書』に拠ればよい。このように3段構えの文献を手元に置いて、まず明治期の中学校・高等女学校教育課程の変遷の調査にかかった。しかし明治前期の太政官布告や文部省布達文は読みにくい。公文式が整ってからの省令や達文は簡潔ではあるが無味乾燥で読み進みたくなくなる。条文が多いとうんざりする。そこで工夫をこらし関連する他の条文と織り合わせて図表化することにした（図表A・B）。また進学率は男子と女子を対比させたグラフをつくったり、学校設置数は年代や地域を対比させたグラフをいくつもつくった。こうすると無味乾燥な法文や統計も面白く読めるようになり、明治期の中学校・

高等女学校の教育課程を学科の変遷から、進学年齢から、修学年限から考察できるようになった。この論文は1963年3月の『日本私学教育研究所紀要3号』に掲載されている。

図表 A
改正教育令下の小学校・中学校進学図



図表 B
明治前期・中学校学科表



明治6年	明治14年	明治19年
修身学	修身	倫理
国語	和漢文	国語及漢文
国語古言		
外国語	英語	第1外国語 第2外国語又ハ農業
地理	地理	地理
歴史	歴史	歴史
算術	算術	数学
代数学	代数	
幾何学	幾何	
測量	三角法	
博物学		
動物学	動物	博物
植物学	植物	
生理学	生理	
金石学	金石	
地質学		
物理学	物理	物理
化学	化学	化学
重学大意		
星学大意		
経済学	経済	
国体	本邦法令	
政体大意		
国勢大意		
性理学大意		
習字・図画・記簿法	習字	習字
	図画	図画
		唱歌
	体操	体操

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

本年2021年にも、The Finalのアニメ放映予定がある漫画フルーツバスケット（原作者：高屋奈月さん、略称：フルバ、2007年ギネスブックで認定：もっとも売れている少女漫画）の2019年TV版第14話（ヒミツだよ）は、涙の感動回で皆さんにぜひおススメしたいです。この作品の主人公は、都立海原高校に通う女学生の本田透さん（声優：石見舞菜香さん）です。作品公式サイトによれば、性格の明るい主人公は「父親は早くに他界、母親も交通事故で亡くしたことからテントで一人暮らしをしている。だが、家事の腕を買われて同級生の草摩由希、そして由希を敵視する草摩夾と一緒に生活することとなる。天然でズレているところもあるが、常にひたむきで心優しい性格」といいます。この主人公と密接にかかわることになる草摩家の人びと、とくに第14話のキーとなる人物は、私も大好きな登場人物である草摩紅葉（声優：潘めぐみさん）くんです。同上サイトでは、主人公より1学年下の紅葉くんは「父親は日本人だが母親がドイツ人なのでドイツ語も話すことができる。幼い外見に反して、大人びた一面も持ち合わせている」とされています。第14話（ヒミツだよ）では、「草摩の人からは両親の話をあまり聞かないと思った［本田］透は、［草摩］紅葉に両親のどちらがドイツ人かと尋ねる。紅葉は笑顔で「Mutti!」と答えるが…」というあらすじ説明が、作品サイトで挙げられています。NL読者諸氏にも、この作品をぜひご覧になっていただければよいかと思いますが、紅葉くんは主人公に対して、自分の生まれ存在した記憶を故意に喪失した母親のことを思いつつも、次のように「僕はちゃんと思い出を背負って生きて行きたいって。たとえば、それが悲しい思い出でも。僕を痛めつけるだけの思い出でも。いっそ忘れたいと願いたくなる思い出でも。ちゃんと背負って逃げないで頑張れば、頑張っていればいつか、いつかそんな思い出に負けない僕になれるって信じてるから。信じていたいから。忘れていい思い出なんて1つもないって思いたいから。…だけど、これは僕の我がままだから。ヒミツだよ」と本音を健気に語ります。主人公同様に、紅葉くんの本音に私もつい涙してしまいました。（谷本）

室積光の小説『都立水商1年A組』（2019年、小学館文庫）を電子書籍で読みふけった。マンガやドラマにもなった『都立水商!』の続編である。前作同様、水商売志望者を対象とした公立高校という奇抜な設定でありながら、現代の学校教育への批判や生徒の自治を最大限に尊重した学校像も描かれている。室月は、旧制第七高等学校卒業生の人生を描いた小説『記念試合』（映画「北辰斜にさすところ」の原作）も書いている。（冨岡）

会員消息

昨年末に入院手術をしてみて、いろいろと自身の入院関係費の内訳をよく考えてみる機会を得ました。私は東京都北区にある総合病院に、2週間近く入院しましたので。主な内訳としては、病棟での食事代（自己負担）が、1回460円×計40回でしたので計18400円となり、入院室料（自己負担）は1日1100円×12日＋半日550円で計13750円かかりました。また私は今回の入院期間が暫くかかるものと考えて、自身にとって洗濯などの面倒がない、当該病院が提携する民間業者が提供するレンタル患者衣（甚平型）＋タオル（バスタオル1枚・フェイスタオル3枚）セットを希望選択し、これが1日477円×13日＋税620円で計6821円でした。また2月初めの時点でも、外来診察治療を受けていることもあって愛用しているおむつですが、入院期間のおむつ代が2948円でした。これらの必要額に対し、病状への手術治療代が加わったものが自己負担の合計でした。幸い自身が加入している民間の医療生命保険による保険給付金が迅速に相応額支払われましたので、結果的には高額な医療費も相殺されまったく実質負担は生じませんでした。今回、私の場合は2つの病院にて治療処置を受けましたので、生命保険会社さんに保険給付金を請求する際には、2つの病院の担当医師による診断書の作成をそれぞれでお願いいたしました。体験して正直驚いたのは、この自身の診断書作成にあたり1通ごとに、4～6千円の作成経費と2週間の期間がそれぞれかかったことです。自身の診断書作成に、これほどの金額と時間がかかるものなのか？と。そして、出来上がった診断書を実は本人が素人目ながらにみてしまうと、あまりに簡易な様式の記入内容でまたビックリでした。（谷本）

勤務校で顧問をしている地域研究部（部活動）が、「第2回高校生ともしびボランティア」の顕彰団体に選ばれました。子どもたちと取り組んだウィキペディアタウンの活動が評価されました。この結果は、真剣に取り組んでくれた子どもたち、出張授業に来てくださった学芸員さん、多くの先生方、全員の思いを繋いだ結果だと思います。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

今年度は、地域の文化遺産とその周辺環境の清掃活動を行っています。コロナ禍でも、精力的に活動を行ってくれる子どもたちの姿に元気と勇気をもらっています。（八田）

先日、博士後期課程への合格をいただき、来年度も学生の身分で研究を続けられることがほぼ決まりました。今後とも研究に励んでいきたいと思います。ただ、修論も終わり、来年度の進路も大方固まると、大変ありがたいことに様々にお誘いをいただくことも多くなり、

どんどん予定が埋まっていっています。ある程度区切りをつけて自分の研究の時間も割かねば、、、と思いながら、いただくお誘いも魅力的で逡巡する毎日です。（猪股）

この時期も長野は雪が降ることが多く、雪とともにある生活は、日々発見の連続です。山裾の地に生活していると、雪の通り道が分かるような山並みの雪化粧を見ることができます。短時間で雪の降り方も変化するため、みぞれから牡丹雪になりゆく様を見るには、ほんの少しの時間があれば十分です。最近の暖かい日和の朝には、野鳥が高らかに歌う声が響き渡り、何とも言えない嬉しさを感じさせてくれます。雪の少ない地で過ごしてきた私にとって、雪とともにある生活は、厳しくも楽しいものです。

今まで観光などで感じていた感覚とは異なり、その地で生活することとは、自然風土と関係性を結ぶことなのだと考えています。それは、個人単位はもとより共同体や社会のあり様にも、同じく言えることなのかもしれません。

柳田国男が江戸期以前の地方の文芸について、「京都中心主義」のようなあり様を嘆じています。

> いわば日本国の歌の景は、ことごとくこの山城の一小盆地の、風物にほかならぬのであった。ご苦労ではないか、都にきても見ぬ連中まで、題を頂戴してそんな事を歌に詠じたのみか、たまたまわが田舎の月時雨が、これと相異した実況を示せば、かえって天然が契約を守らぬように感じていたのである。（中略）だから世にいうところの田園文学は、今にいたるまでかさぶたのごとく村々の生活を覆うて、自由なる精気の行き通いをさえぎっているのである。
>
> （柳田国男『雪国の春』角川ソフィア文庫p14より）

何のことでも自己の関心事に絡めてしまうのは避けたいものですが、このような指摘は、教育の世界にも当てはまるところが少なくないように思います。殊に開設まもない地方大学に勤めている身としては、「東京中心主義」のような大学教育のあり様を、日々のように痛感することが多いです。自然風土に合った大学教育とはどのようなものか。地方大学の存在意義を考えていく上で、自然風土という土台から考えを巡らせていくことの重みを感じています。（金澤）

やっと2020年度の成績報告などが終了し、さあ研究だ！と思ったのですが、来年度にむけた教務関係の仕事や学内史資料の整理・保存関係の予定がたちまち入りつつあります。やはり時間は工夫して作るものですね。（冨岡）